大田市埋蔵文化財調査報告　12

石見銀山遺跡発掘調査概要4

1 9 9 1 , 3

島根県大田市教育委員会

序

石見銀山は中世後期から開発され、戦国時代から江戸時代の初期にいたり最盛期を迎えます。そして織豊政権や江戸幕府の資金庫として重要視されるとともに、その精錬技術は各地の鉱山に伝えられ、日本の鉱山のなかでも先駆的な役割を果たしたことで有名です。

石見銀山遺跡には国指定史跡の代官所跡をはじめ数多くの遺跡が存在しますが、これをどのように保存し、活用していくかということは当市のみならず島根県全体の課題となっています。

この貴重な文化遺産を子孫に引き継ぐために、昭和44年の国指定の前後から、いくらかの部分については整備をはかり活用を促し現在に至っております。昭和58年度からは島根県教育委員会の主導による石見銀山遺跡総合整備計画策定事業が開始され、これを踏まえて昭和61年12月には町並みの部分が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。また史跡については平成元年７月には国指定の龍源寺間歩を整備し、一般公開として活用を始めたところです。

このような整備事業の進捗とともに、文化財保護の立場から整備地域周辺の遺跡の範囲や保存状況の確認が必要と考え、昭和63年度から発掘調査をおこなっています。今年度は石見銀山遺跡のなかでも拠点となる蔵泉寺口番所跡と大龍寺谷地区の調査を実施しました。

この報告書が今後の整備事業や石見銀山史の解明に広く活用されることを祈念いたします。

平成３年３月

島根県大田市教育委員会

教育長　渡　辺　晴　夫

例　　言

1. 本書は平成２年度の国県補助事業として島根県大田市教育委員会が実施した、石見銀山遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査体制は下記のとおりである。

島根県大田市教育委員会

教育長	渡辺	晴夫
文化振興室	渡	吉正
	清水新二郎	
	遠藤	浩巳
	林	泰州
	山田	幸
調査指導	村上	勇（広島県立美術館）
	川原	和人（島根県教育委員会文化課）
	大橋	康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
	小野	正敏（国立歴史民俗博物館）

3. 収録した地図・実測図は大田市教育委員会が作成したものを主とし、一部については関係機関作成のものを利用した。

4. 出土遺物及び作成した図面・写真は大田市教育委員会で保管している。

5. 実測図等に示した方位はいずれも磁北である。

6. 本書の執筆・編集は上記の遠藤浩巳がこれをおこない、関係各位の協力を得た。また、出土遺物については大橋康二・村上　勇の両氏よりご教示をいただいた。記して謝意を表わします。

目　　次

頁

Ⅰ　調査の概要・経過 …… 1

Ⅱ　石見銀山遺跡の概要 …… 3

Ⅲ　調　査　の　概　要 …… 7

Ⅳ　ま　　と　　め …… 20

図版

挿　図　目　次

頁

図1　石見銀山遺跡位置図（1/25,000） …… 2

図2　蔵泉寺口番所跡調査区設定図（1/1,000） …… 7

図3　蔵泉寺口番所跡遺構実測図 …… 9

図4　蔵泉寺口番所跡出土唐津系陶器実測図 …… 10

図5　蔵泉寺口番所跡出土陶磁器実測図 …… 11

図6　大龍寺谷地区調査区設定図 …… 12

図7　大龍寺谷地区Ⅰ区遺構実測図 …… 14

図8　大龍寺谷地区Ⅱ区遺構実測図 …… 15

図9　大龍寺谷地区Ⅰ区出土陶磁器実測図 …… 16

図10　大龍寺谷地区Ⅱ区出土陶磁器・鉄製品実測図 …… 17

図11　大龍寺谷地区Ⅱ区出土要石・柱根実測図 …… 17

図12　蔵泉寺口番所跡遺構配置図（1/200） …… 20

Ⅰ　調査の概要・経過

石見銀山遺跡は昭和44年に山吹城跡や坑道跡７ケ所などの計14ケ所が史跡指定を受け、代官所跡と坑道跡である間歩を中心に整備や活用が進められ、今日では年間来訪者数も20万人を越えるまでとなった。

埋蔵文化財としての石見銀山遺跡は、これまでに指定された山吹城跡や間歩などがあったが、いずれも大まかな様相や写真などによる整備が中心となり、近世考古学の分野からは取りあげるに至らなかった。しかし近年、中近世遺跡の調査・整備の事例が全国的に増えるとともに、学問としての歴史考古学が確立されつつあるという状況のなかで、石見銀山遺跡の保護と活用が再認識されるようになった。

昭和58年から開始された石見銀山遺跡総合整備計画策定事業は４ケ年計画で石見銀山遺跡の整備にかかわる基本構想、基本計画の策定をめざし調査と検討をおこなうものである。このなかで遺跡の調査については、遺跡を面的に保存していくために現地調査・地形測量・主要箇所の発掘調査を継続的に実施して保存のための資料を得る必要がある、と指摘された。この基本計画の策定事業のなかで昭和58年度には大田市教育委員会が蔵泉寺口番所跡・代官所南地区・公園地区の３ケ所で発掘調査を実施し、代官所南地区では代官所に関連すると思われる小規模な建物跡を検出した。昭和62年度には島根県教育委員会が石見銀山関連遺跡分布調査を実施し、城跡・寺跡・役所跡や銀山街道などの確認がなされた。

その後、昭和62年12月には、町並みの部分が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、平成元年７月には国指定史跡の龍源寺間歩を整備し、坑道内を通り抜け一般公開することとした。このような関連整備事業の進捗にたいし、埋蔵文化財の保護の立場から昭和63年度から発掘調査を再開した。昭和63年度は龍源寺間歩の入口に置かれた四ツ留役所跡を、平成元年度は向陣屋跡・蔵泉寺口番所跡・植市場集落跡で調査をおこなった。調査の結果、いずれの箇所も遺構は重層的に良く遺存しているとともに、遺物も時期的にまとまりのあるものとして出土することが判明した。

平成２年度は、元年度からの継続で蔵泉寺口番所跡で約50㎡、山吹城跡の大手に隣接する大龍寺谷地区で約50㎡の調査を実施した。

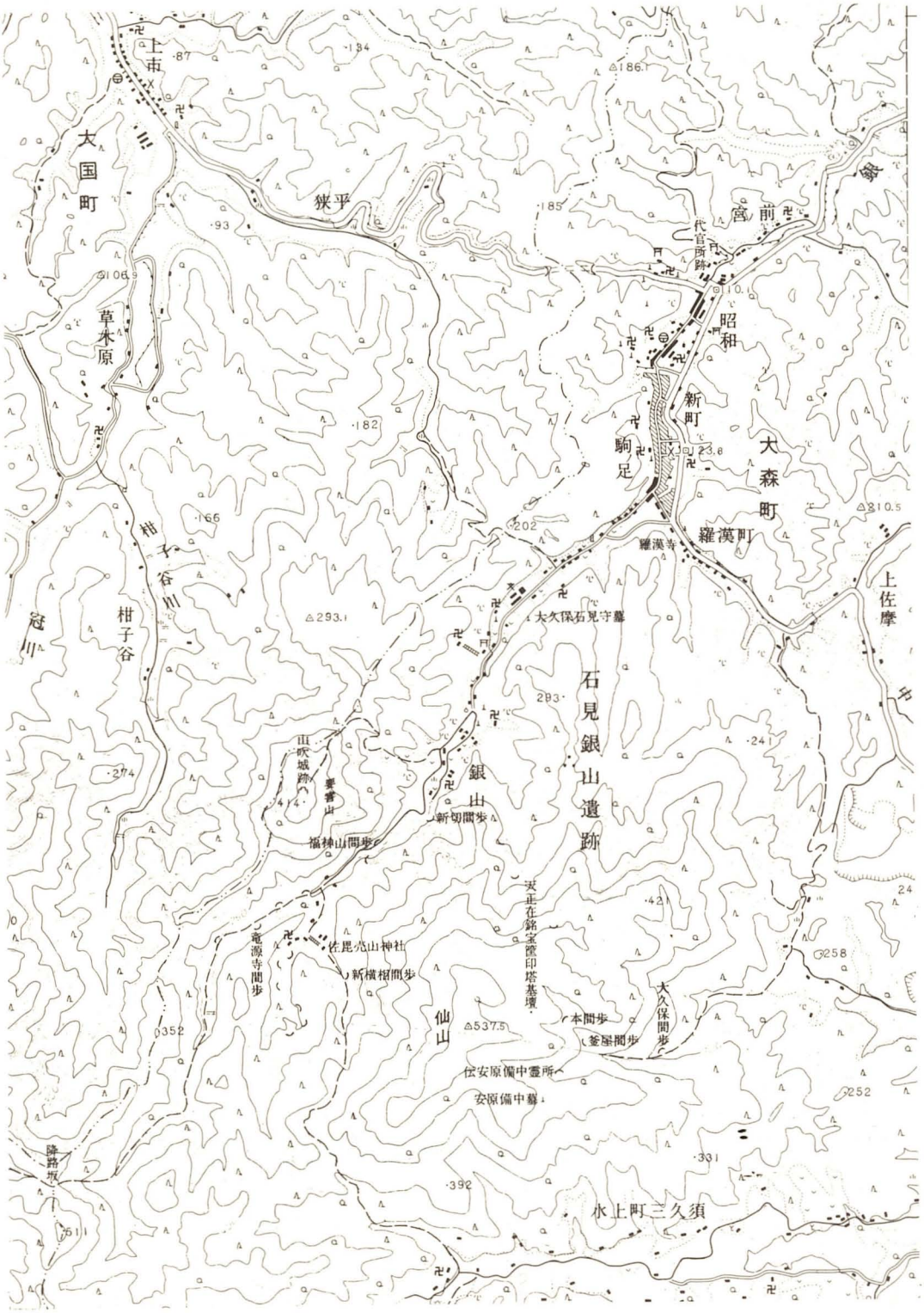


図１　石見銀山遺跡位置図（1/25,000）

Ⅱ　石見銀山遺跡の概要

1.　銀山史について

石見銀山は鎌倉時代末期の延慶２年(1309)に発見され、本格的な採掘は大永６年(1526)に博多の商人神谷寿禎が入山し、天文２年（1533）寿禎が博多から慶寿と宗丹を呼び、灰吹精錬法が伝えられてからといわれる。これ以後産銀量は著しく増大し日本の銀山のなかでも重要な位置を占めるようになる。当時の南蛮貿易においてポルトガルは中国の生糸・絹織物を搭載し日本に来航し、銀をヨーロッパに持ち帰るという仲継貿易を行なうが、この時の銀の大部分が石見銀山産であったと推測されている。

石見銀山は戦国期に至り大内・尼子・毛利などの戦国大名によって山吹城を拠点とした争奪戦が繰り広げられる。最初に治めたのは周防国の大内義興で、大内氏は沢山の掘り子大工を連れて入山し採掘を始めた。享禄４年（1531）には邑智郡川本温湯城主小笠原長隆が銀山を奇襲攻撃して掌握するが、３年後には大内氏は再びこれを奪い返した。その後尼子氏・毛利氏が加わり永禄５年（1562）に毛利氏が完全掌握するまで争奪戦は35年余り続いている。その頃中央では秀吉が天下統一を進め、石見銀山は秀吉と毛利氏の共同管理に移行し、秀吉は文禄２年（1593）の朝鮮出兵時に、石見銀を博多に運んで貨弊に鋳造して文禄丁銀（ゆずり葉銀）を造り兵糧を仕入れて戦費に充てたといわれる。

慶長５年（1600）関が原の戦いで徳川方が勝利を納めると、家康は石見銀山に上使を派遣して翌６年から大久保長安を銀山の管理奉行とするとともに、周辺の144ケ村を併せて石見銀山御料として直轄地とした。初代奉行の大久保長安は坑道掘りを導入するとともに、御料内の検地などを実施した。この頃備中国から来山していた安原伝兵衛という山師が釜屋間歩の鉱脈を発見し、おびただしい銀を掘り出し貢銀3,600貫を家康に運上し、辻ケ花染丁子文胴服一領と扇一柄を拝領した。

石見銀山の最盛期は戦国時代末から江戸時代の初期といわれ、『石見国銀山日記』によれば「慶長の頃より寛永年中大盛、士稼の人数二十万人、一日米穀を費やすこと千五百石余」とか「家数弐万六千軒余、寺百ケ寺程も有之」と記されている。人口20万人は誇張があるにしても人口10万人前後はあり、この頃の産銀量も年間8,000貫から10,000貫はあったと推定されている。江戸時代中期になると産銀量は著しく減少し、延宝年間（1673～1680）に入ると奉行も代官に替り、産銀量年間400貫位に減り、その後しだいに減少し幕末の安政６年（1859）には30貫となった。

江戸時代265年間には奉行・代官・預りが59人も入れ替わり、石見銀山御料約150ケ村4万8千石の統治と銀山の管理をおこなった。そのなかでも初代奉行大久保長安と享保17年（1732）の飢饉を救った19代目の代官井戸平左衛門は有名である。

慶応2年（1866）に戊辰戦争が起き長州軍は石見へ進撃し、益田の七尾城、浜田城を落して銀山御料内へ進入、最後の代官鍋田三郎右衛門は備後国の上下陣屋に逃亡した。これにより石見銀山は再び毛利氏の管理となり毛利大膳大夫の名において、長州藩の高州庄吉と同藩士武田伊三清が代官心得として旧銀山料の管理と統治の任にあたった。この頃米の相場が急に上り大田地方のあちこちで百姓一揆が起きていたが、長州軍の手で鎮圧されている。

明治政府が誕生すると、明治2年8月から約半年間大森県が置かれ、翌3年からは浜田県と改められ、同9年には隠岐・松江・浜田をあわせて現在の島根県がつくられた。幕末から明治期の産銀量は慶応2年（1866）には年産20貫まで減り、明治期になり大森町の有志が一鉱区を掘ったがおもわしくなく、明治5年の浜田沖地震では銀坑道のほとんどが崩壊した。明治20年になって大阪の藤田組の経営となり、その後同和鉱業(株)に受け継がれ、明治25～29年頃までは、一時的に産銀量が年平均540貫と増加した。

大正6年の銀山（仁摩町の永久坑）の従業員は約700人いたが、坑道の地下水が多量に湧き出るため採算が合わず、大正12年3月に閉山されることになった。

2. 石見銀山に関連する遺跡について

(1) 城館遺跡

戦国期石見銀山をめぐる争奪戦の拠点となった山吹城跡をはじめいくつかの城館遺跡がある。山吹城跡は大森町字古城山ホ271番地に所在する。縄張りは山頂部に主郭を置き南北に階段状に曲輪を配置している。主郭の南に大規模な空堀、南斜面には計19本の竪堀、北側の曲輪には一部石垣が見られる。これらの山城としての施設は小笠原氏・大内氏・尼子氏・毛利氏と城主が替わるごとに何度かの改修がおこなわれており、現在残る遺構は毛利時代の可能性がある。城の縄張りの全容については明らかになっていない。

山麓には長大な石垣があり、字名から「下屋敷」「吉迫御文庫」という地名が残っていることから、この部分が城の大手にあたると思われる。大手の南には「魚店」「京店」「千京」「上市場」などの地名があり、戦国期には城下町が形成されていたと考えられる。

山吹城跡の南側に位置する仙の山の山頂には曲輪群があり、『雲陽軍実記』によれば尼

子氏が山吹城を領有していた時に、毛利氏が尼子氏を攻める際に在陣したといわれる。付近には字名として「中曽根馬場」があるが、城全体の構造については未調査である。

山吹城跡から南西2㎞のところに矢滝城跡がある。小笠原氏による築城と伝えられるが未調査のため不明な点が多い。矢滝城跡から山吹城跡に至るまでには出城的な曲輪が配置されているといわれ、今後の調査が必要である。

(2) 銀山支配関連遺跡

銀山支配の遺跡として代官所跡・番所跡などがある。代官所跡は南北に細長い谷間に形成された大森の町並みの北側に位置し、現在表門と門長屋を残している。この建築年代は棟札から文化12年（1815）の建築といわれている。また天保12年（1841）の絵図があり代官所内の構造や関連する建物の配置・構造が記されている。代官所跡の東側には、仲間長屋跡・向陣屋跡・御銀蔵跡・馬場跡などがあり、代官所周辺に行政関係の機関・役宅が置かれた。

銀山はその周囲に柵列を巡らし「山内」として閉鎖された空間を形成していた。銀山の入り口には九つの番所が置かれ、遺跡としては蔵泉寺口番所跡・坂根口番所跡が知られる。平成元年度の蔵泉寺口番所跡の調査では石列・整地面などが検出された。他の番所跡については位置・内容について明らかにされていない。また銀山支配の役所として坑道の入り口に置かれた「四ツ留役所」がある。その建物の構造等については『石見銀山絵巻』や古文書などから知ることができ、銀山附の役人が詰めた役所と掘り出した鉱石置場があった。昭和63年度の調査で龍源寺間歩の四ツ留役所跡を調査しており、建物の基礎と思われる石列を検出するとともに、江戸時代中期頃の陶磁器類が出土している。

(3) 銀生産遺跡

銀生産関係の遺跡としては坑道跡・吹屋（精錬所）跡・集落跡などがある。史跡指定された坑道跡としては大久保間歩・釜屋間歩・本間歩・龍源寺間歩・福神山間歩・新切間歩・新横相間歩の七坑道があるが、文政6年（1823）の間歩改めでは休止坑を含め279坑を数えている。これらの坑道跡について主要なものについては坑道口部分の略測がなされている。また仙の山山頂付近には於紅ケ谷縦坑群や露天掘りの跡が数多く見られる。

銀精錬をおこなった吹屋跡としては栃畑谷灰吹跡・山神奥灰吹跡等があるが、吹屋・灰吹法について十分に解明されていないため今後の調査が必要である。

銀生産の集落跡として大規模なものとしては石銀集落跡・栃畑谷集落跡等がある。この

うち石銀集落跡は仙の山の山頂に位置するが、分布調査により当初確認した範囲より集落の範囲はかなりの広がりを持つことが判明している。石銀集落跡は石垣・井戸跡・墓所など多様な内容があり、戦国時代から江戸時代の鉱山集落としては今後調査が必要である。

清水谷に残る清水谷精錬所跡は明治時代のものであるが、大規模な石垣を築いて構築された精錬所跡である。

(4) 信仰遺跡

現在知られている信仰遺跡としては墓地・供養塔などの石造物と寺院跡・神社がある。墓地・供養塔などの石造物については戦国時代のものとしては史跡指定されている天正在銘宝篋印塔や龍昌寺跡・徳善寺跡・大龍寺跡の宝篋印塔や無縫塔等があげられる。これらのほかにも戦国時代末から近世初頭の石造物は数多く存在することが予想されている。

江戸時代にはいると史跡安原備中墓・伝安原備中霊所、市指定史跡奉行竹村丹後守墓・同代官鈴木八右衛門墓・同代官会田伊右衛門墓など多くの墓が確認されている。このほかにも大森町内の寺院には近世墓が多数残されている。

『石見国銀山旧記』には銀山の最盛期には「寺百ケ寺」という記録があるが、大森町に現在するのは13寺であるものの、昭和60年度の分布調査では33ケ所の寺院跡が確認されている。今後は分布調査と地名の調査等が必要である。

神社は延喜式内社の城上神社、毛利元就を祀る豊栄神社、銀山の守護神としての佐毘売山神社がある。このうち豊栄神社には江戸時代末の石造物群がある。

羅漢寺の境内には五百羅漢坐像群があり、石見地方の石工集団の動きなどとあわせ調査が必要なものである。

(5) その他の遺跡

大森の町並みの中には町年寄遺宅・郷宿遺宅・地役人遺宅・同心遺宅などの建物があり、その付属建物や周囲の構造については今後の調査が必要である。また寛政12年（1800）の大火以前の町並みの遺構についても遺存している可能性がある。

銀を温泉津港や赤名経由で尾道に輸送した銀山街道については降露坂を中心にいくらかの部分が残っているが、その全容については明らかではない。

Ⅲ 調 査 の 概 要

1. 蔵泉寺口番所跡

江戸時代、石見銀山には柵列が巡り九つの番所で人や物資の出入りが厳しく管理されていた。この蔵泉寺口番所跡は山内の北東に位置する出入口にあたり、番所のなかでも規模が大きく、銀山への主要道にあたることから大森御役所（代官所）が管理のうえで重要視したといわれる。

蔵泉寺口番所跡は昭和58年度・平成元年度からの継続で調査を実施した。昭和58年度の

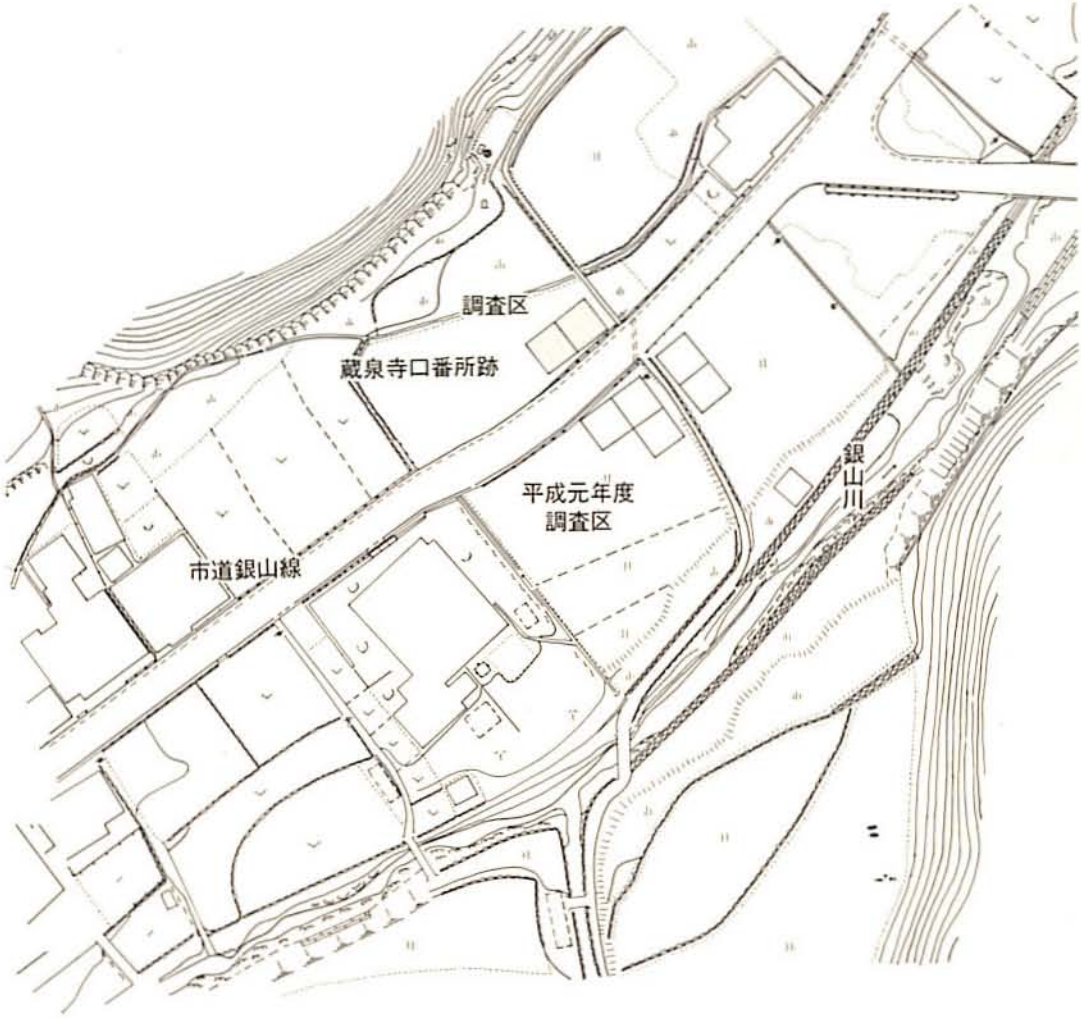


図２　蔵泉寺口番所跡調査区設定図（1/1,000）

調査では蔵泉寺口番所跡の東側の刑場跡を調査した結果、番所に関連する遺構は検出できなかった。平成元年度の調査では番所跡の南側の水田の調査を実施した結果、調査区内で全長7ｍの南北方向に延びる石列を検出している。今年度の調査は蔵泉寺口番所が位置したと思われる畑地50㎡を調査対象とし5ｍ四方のグリットを2ケ所設定した。

遺構

検出した遺構としては、整地面の広がりと若干の石列がある。第1整地面は表土から80～90㎝下で検出し、この面で石列を確認している。調査区のほぼ全域にわたり整地面は広がりを持っているが、西側に向かうほど幅が狭くなっており、整地面の境界が孤を描くあたりから粗く積まれた石列を確認することができる。石列は挙大のものから30㎝大のものまであるが、部分的に欠落している。この整地面の広がりと石列については、番所の広場と道の可能性がある。

第1整地面の下約40㎝に第2整地面が、第2整地面から下約50㎝に第3整地面がある。これはサブトレンチにより確認した範囲内だが、第1整地面と同様に坑道から運び出した礫と銀精錬の銀滓のカラミを固く叩き締めた層である。

調査区内の土層は、耕作土の下が黒色土層、黒色砂礫層、暗褐色砂礫層、黒褐色砂礫層で第1整地面になる。これらの層はいずれも坑道から運び出した礫とカラミを多量に含んでおり銀山の坑道付近から運ばれてきたものと思われる。第1整地面は粘土を若干含む黄褐色砂礫層で固く締まるものだが、その下は黒色砂礫層、黄褐色粘質土層で第2整地面となる。第2整地面は茶褐色砂礫層で上面が固く締まるとともに、下面も固く締まり第3整地面となる。この茶褐色砂礫層の下が砂礫を含む青灰色粘土層になるが、河原石や木片をいくらか含んでいるところから銀山川の河床となった可能性があり、この層は確認した範囲で30㎝以上になる。

これらの検出した遺構と土層から蔵泉寺口番所は何回かの造成をしながら整地されたと考えられる。昨年度の調査で検出した石列、あるいは現在の道路と今回の整地面の広がりの位置関係を考える必要がある。

遺物

出土遺物としては陶磁器類があげられる。出土地は整地面上からのものはほとんど無く礫・カラミを含む整地層からである。整地層から出土した陶磁器は中国磁器、唐津・伊万里といった肥前陶器が中心で、比較的上層からは近隣で焼かれた石見焼やカワラケなども

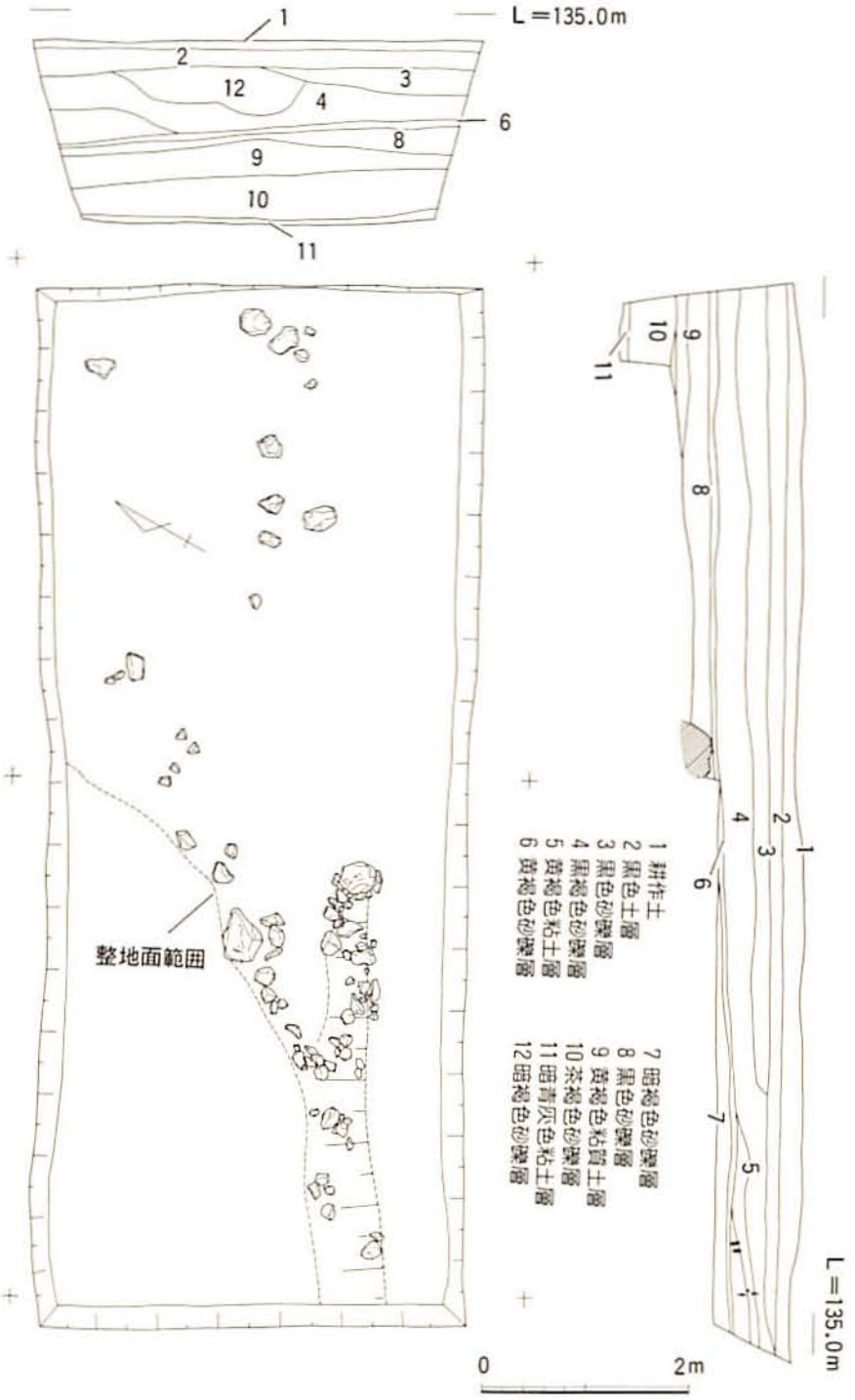


図3　蔵泉寺口番所跡遺構実測図

含まれている。

礫・カラミを含む整地層から出土する陶磁器類には、全体として小片で摩滅しているものが多いという特徴をもつ。このことはこの礫・カラミの層が二次的に運ばれてきたことを示すものであって、その場所は銀山の坑道付近と考えられる。またこれらの出土した陶磁器類は、出土した層は違うが時期的に大まかに二つに分けることができ、一つは銀山の開発から最盛期を迎える16世紀後半から17世紀の前半の時期にあたる中国陶器と唐津焼のグループ（このなかには初期の伊万里焼も若干含まれる）、もう一つは比較的上層の礫やカラミをあまり含まない整地層から出土する17世紀後半から19世紀前半の時期の肥前磁器（伊万里系）・石見焼・カワラケなどのグループである。

16世紀後半から17世紀の前半の中国磁器については皿を中心とする染め付けが多く、これと共伴する唐津焼は胎土目をもつ碗・皿などが多い。17世紀後半から19世紀前半の肥前の磁器は、18世紀後半にみられる広東碗と呼ばれる伊万里系の碗などを中心に出土している。

蔵泉寺口番所跡から出土した遺物としては、陶磁器類の他に古銭・硯などがある。陶磁器類については代表的なものを図４・５に示す。

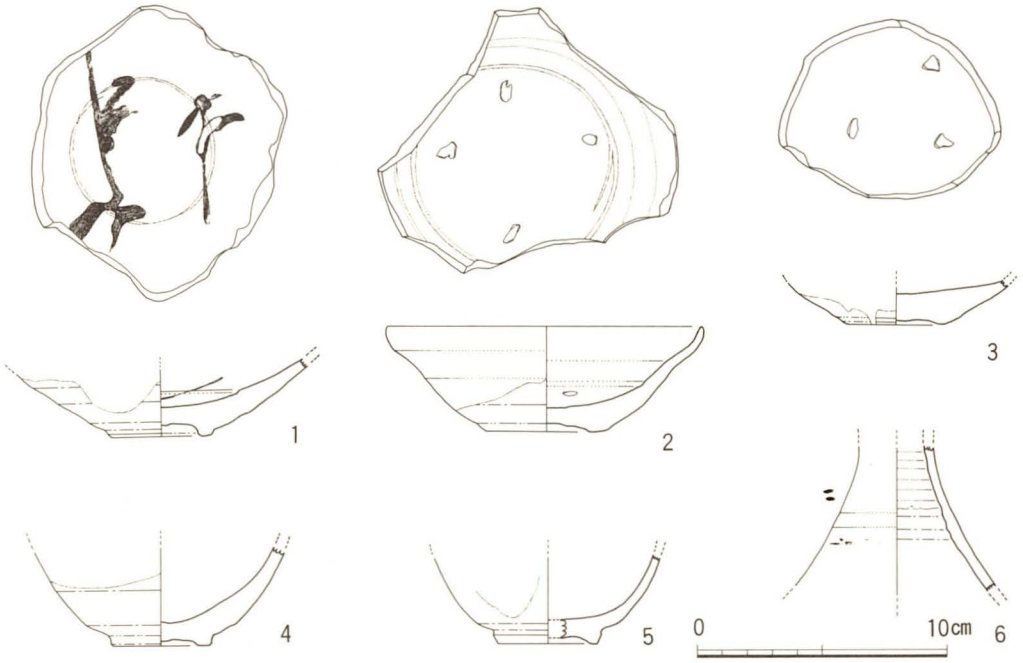


図４　蔵泉寺口番所跡出土唐津系陶器実測図

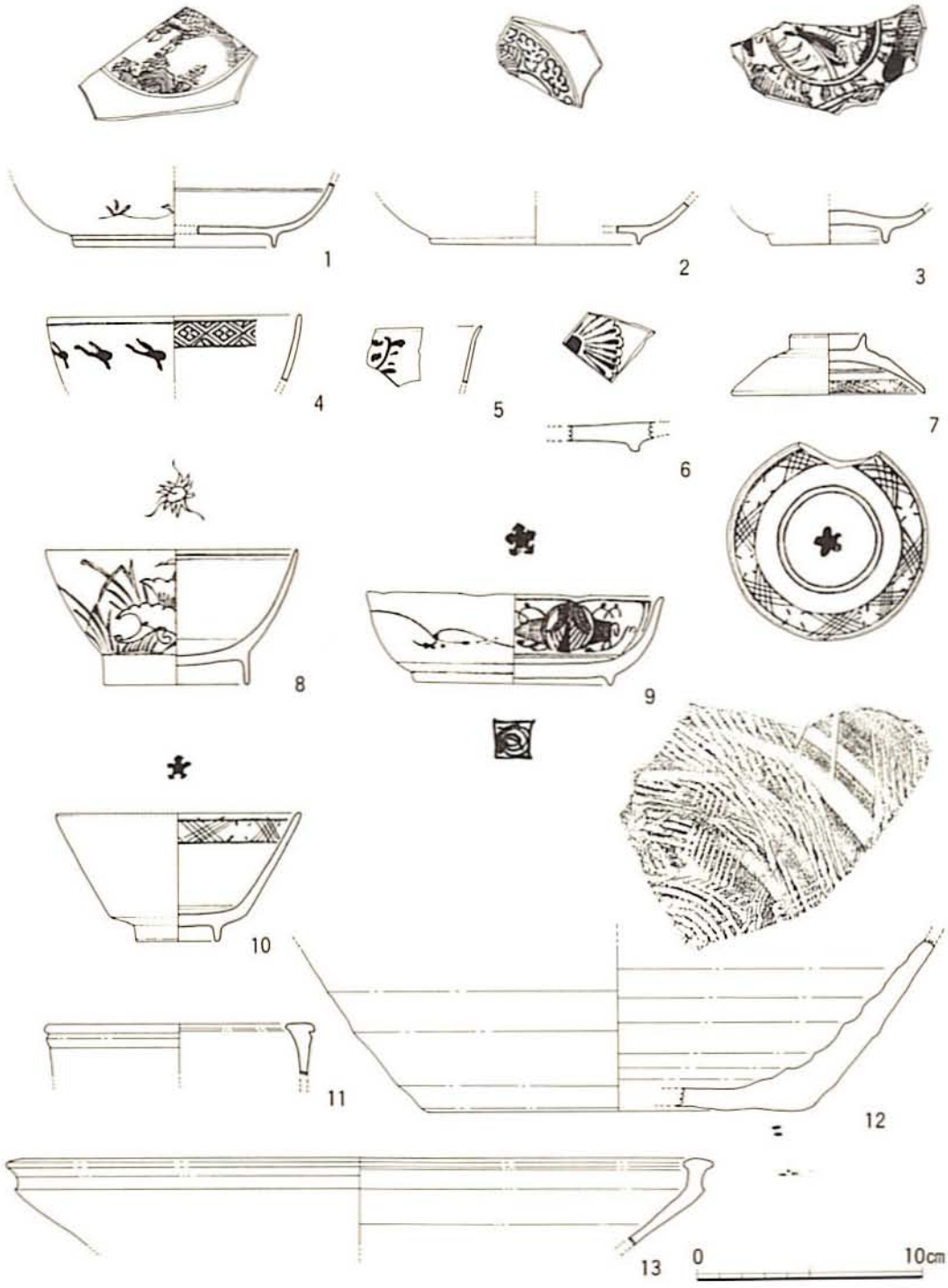


図5　蔵泉寺口番所跡出土陶磁器実測図

（1～5　中国磁器　6～10 肥前系磁器　11～13 唐津系陶器）

2. 大龍寺谷地区

大龍寺谷は山吹城大手の東に位置する幅約25m、奥行約150mの谷である。谷奥には大龍寺跡があり幅約60m、奥行約40mで境内地が広がる。大龍寺は臨済宗東福寺の末寺で本尊釈迦如来、天正12年（1584）に清泉和尚の創立と伝える。縁起等に関する記録は残っておらず、嘉永4年（1851）に大洪水で破壊したが邑智郡浜原妙用寺遠宗和尚が再建し、明治27年に益田市高津町に移転したという。現在寺跡には歴代の住職の無縫塔が、背後の墓地跡には宝篋印塔が確認できる。

図6　大龍寺谷地区調査区設定図

大龍寺谷の現状は谷奥に寺跡があるものの他は休耕田となっているが，明治時代にはまだ住宅があったといわれている。この谷は山吹城の大手に隣接すること、また谷奥からは山吹城跡の牛ノ首に至ることを考えると、戦国時代において山吹城の防御の点においても重要視されるとともに、谷の入り口部分に城下町の広がりがあると予想された。また江戸時代には鉱夫の住宅等が存在した可能性もあり、遺構の有無及遺存状況の確認を目的として調査を実施した。

調査は谷の入り口部分をⅠ区とし4ｍグリットを2ケ所、Ⅰ区から奥に約20ｍの地点で4ｍのグリットを1ケ所設定した。

遺構

Ⅰ区では表土から下約80㎝のところで整地面を検出した。この面から検出した遺構としてはピット5穴と溝状の遺構が2ケ所ある。ピットは径約15～20㎝で間隔は一定ではないが一直線に並んでいる。このピットの性格については小規模であり、ピット内に木質が若干残っていたことなどから柱穴にはならず杭か柵の可能性がある。溝状遺構は調査区内で2ケ所検出し、西側のものは幅約50～60㎝深さ約10㎝、長さ約3ｍ以上、東側のものは幅約40～50㎝深さ約5㎝、長さ約2.5ｍ以上を測る。

Ⅰ区の土層は耕作土の下が茶褐色土、褐色土、暗褐色土となり、暗褐色土の上面が非常に固く、これが整地面になる。この層は坑道から運び出された礫やカラミなどからなる層で厚さ約20～30㎝で、遺物包含層である。この下が礫層となるが、礫のみの単純層で整地層の基盤層として入れたものと考えられる。礫層の下は暗灰色粘土層で陶磁器類を含まない層であるが、自然木の木片とともに加工痕の残る杭状の木製品も出土しており、谷奥から流れてきた可能性がある。この層は約50㎝以上にもなる。

Ⅱ区は表土から下約90㎝のところで整地面を検出した。Ⅱ区の土層は耕作土の下が明灰色粘土、茶褐色粘質土となる。この茶褐色粘質土は炭化物・礫などを含むとともに、陶磁器類を含んでおり、ある時期に整地されたと考えられる。この茶褐色粘質土の下面が遺構面になる。検出した遺構は柱根の残る柱穴と埋め込んだ要石（かなめいし）がある。柱穴は径約25㎝の円形で、柱根は一辺が約15㎝で加工された方形のものである。要石は鉱石を砕く際に台石となる石で、本来床面に埋め込んで使用したといわれていたが、遺構として確認したのは初めてである。またこの遺構面には10～20㎝程度の礫が埋め込まれて整地されており、特に要石の周りに集中していた。この遺構面は暗灰色粘土で築成されており、厚さ40㎝以上になることをサブトレンチで確認している。この暗灰色粘土層も遺物包含層

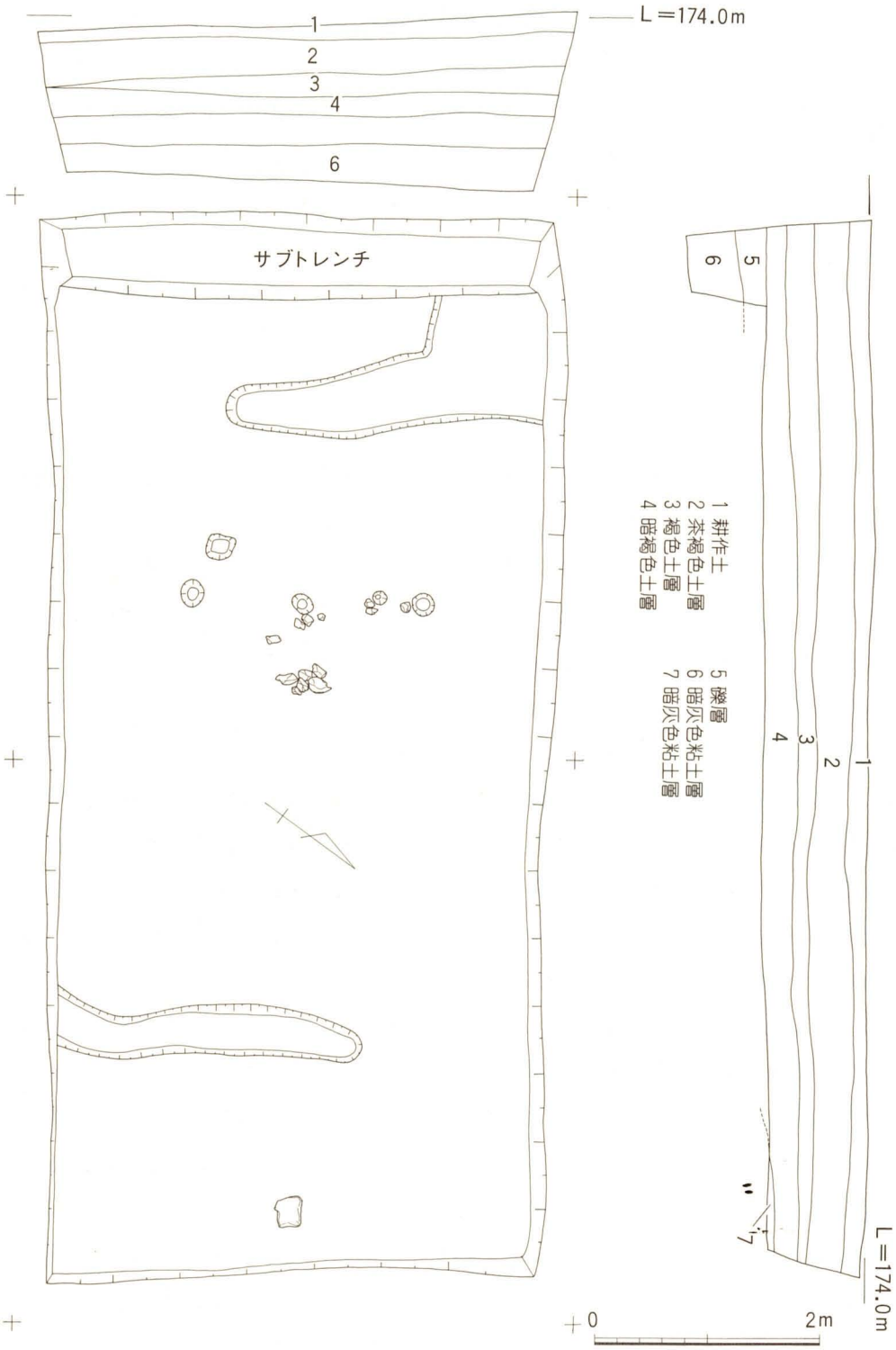


図７　大龍寺谷地区Ｉ区 遺構実測図

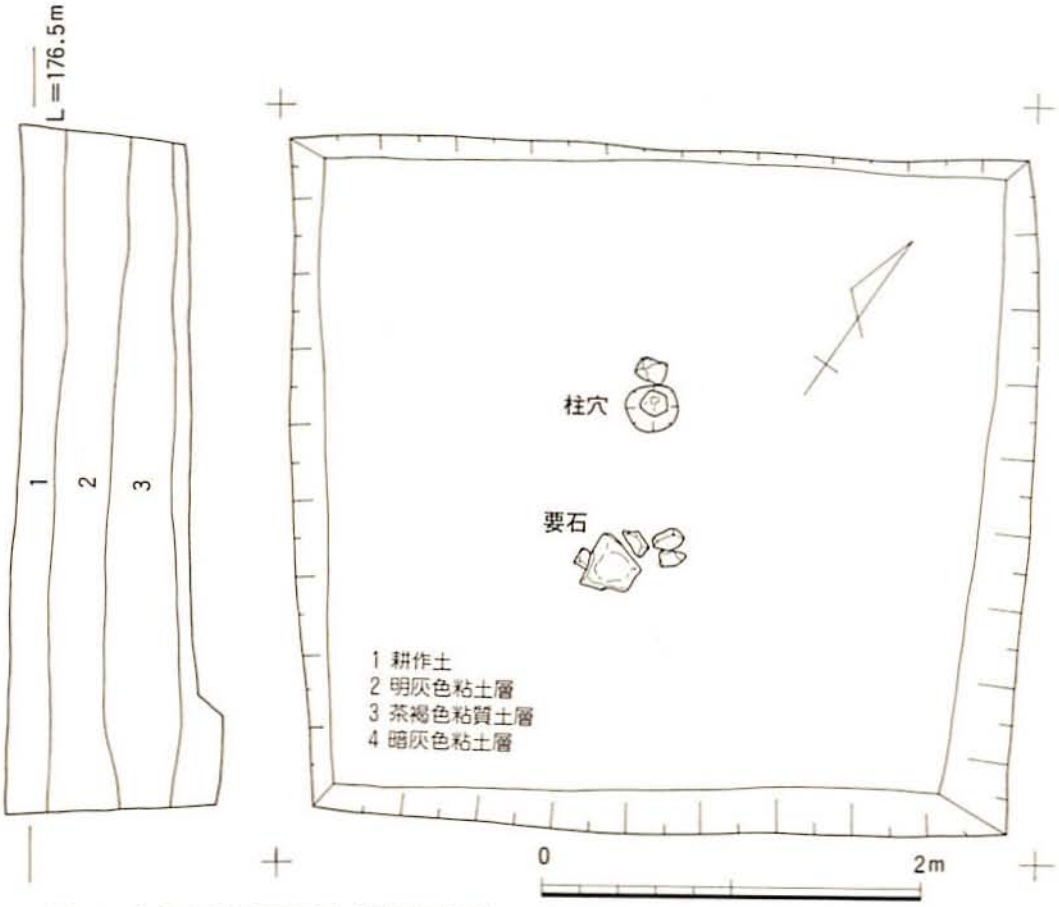


図8　大龍寺谷地区Ⅱ区 遺構実測図

である。

Ⅱ区で検出した遺構の性格については、要石があること、遺物として坑道で使うノミが出土していることから、鉱夫が住んだ建物跡と考えられる。調査面積が限られていたことで、その構造や規模については不明な点が多いが、大龍寺谷にはある時期鉱夫の住んだ建物が何棟かあった可能性がある。

遺物

出土した遺物は陶磁器類が中心である。これらの陶磁器はいずれも整地層から出土しているもので、遺構に伴うものはほとんどない。その年代についても銀山が最盛期を迎える16世紀後半から17世紀前半のものが中心で、わずかであるが大龍寺に関連すると思われる香炉などの仏具がある。陶磁器については生産地・年代の比較的明確なものを選び、観察表で掲げることとし、ここではその概要について述べたい。当初出土する遺物については城下町との関連で16世紀前半以降の遺物を考えていたが、大半は16世紀後半以降のものである。特に16世紀第3四半期から17世紀初頭（慶長期前後）の中国磁器・唐津焼が中心と

なり、それ以後の陶磁器としても肥前陶磁が中心となる様相を示す。全体として肥前系・中国系のものが圧倒的に多く、備前系がわずかにあり、瀬戸・美濃系はほとんどないというセット関係になる。

その他の遺物としてはノミ・要石がある。ノミは長さ約33㎝、断面の一辺が約1.4㎝の方形で、先端は本来は鋭利になっていたと思われるが、使用のため丸くなっている。要石は約30㎝程度の安山岩の自然石を使用したもので、2つの面がくぼみが認められ、かなり長期にわたり使用されたものと思われる。

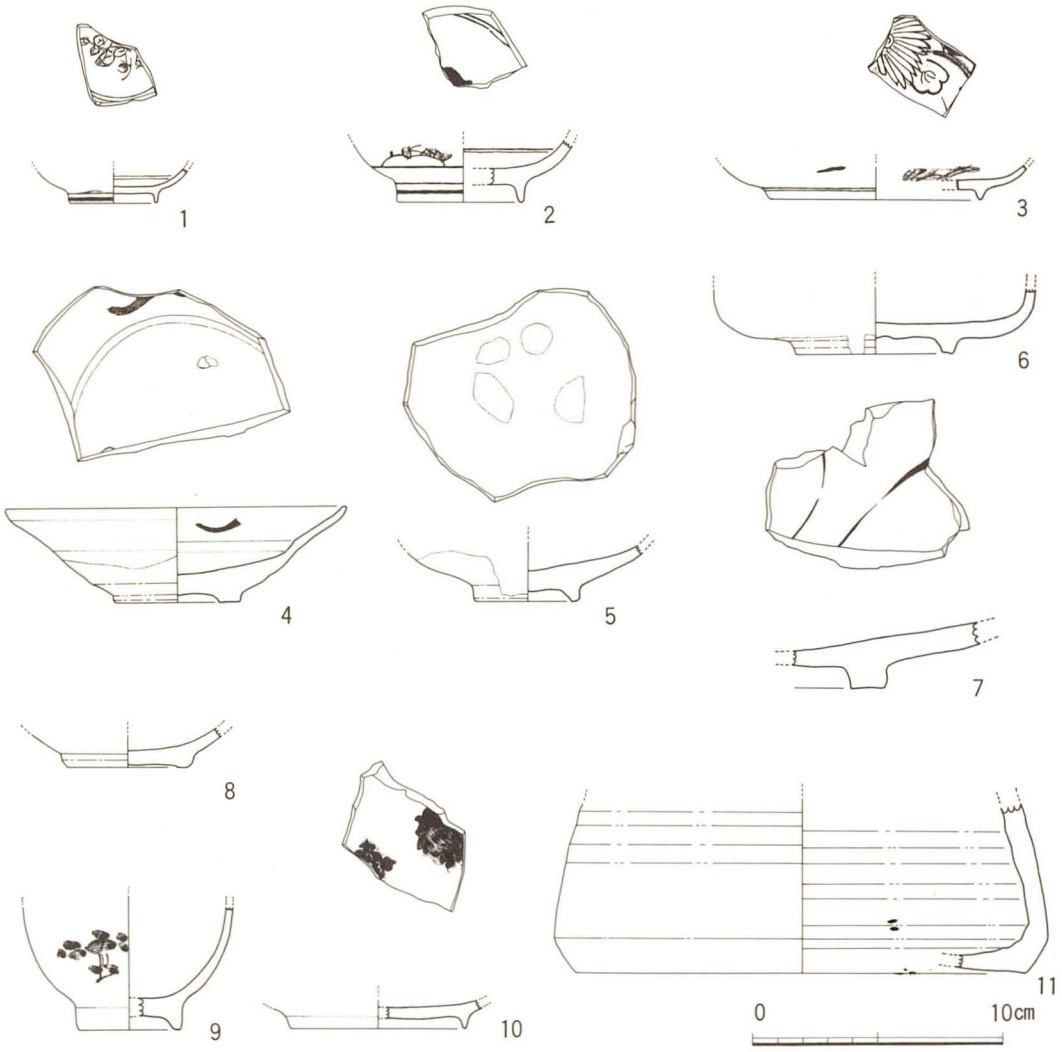


図9　大龍寺谷地区Ⅰ区出土陶磁器実測図

1. 中国(4) 2. 中国(5) 3. 中国(34) 4. 唐津(47) 5. 唐津系(92) 6. 唐津系(90)
7. 唐津(50) 8. 福岡か(28) 9. 肥前系(113) 10. 肥前系(114) 11. 備前系(124)
(　　)は一覧表番号)

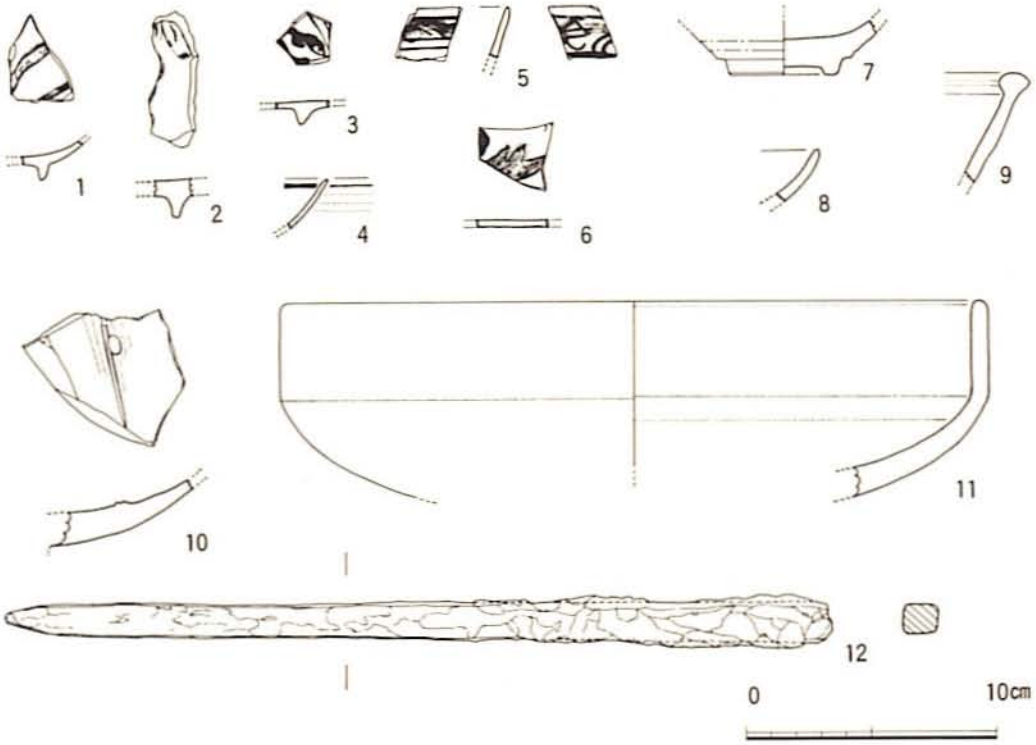


図10　大龍寺谷地区Ⅱ区出土陶磁器・鉄製品実測図

1. 中国(131) 2. 中国(143) 3. 中国(142) 4. 中国(140) 5. 中国(135) 6. 中国(141)
7. 唐津系(146) 8. 唐津(146) 9. 唐津か(159) 10. 肥前(153) 11. 上野・高取系(158)
12. 鉄製品(ノミ)

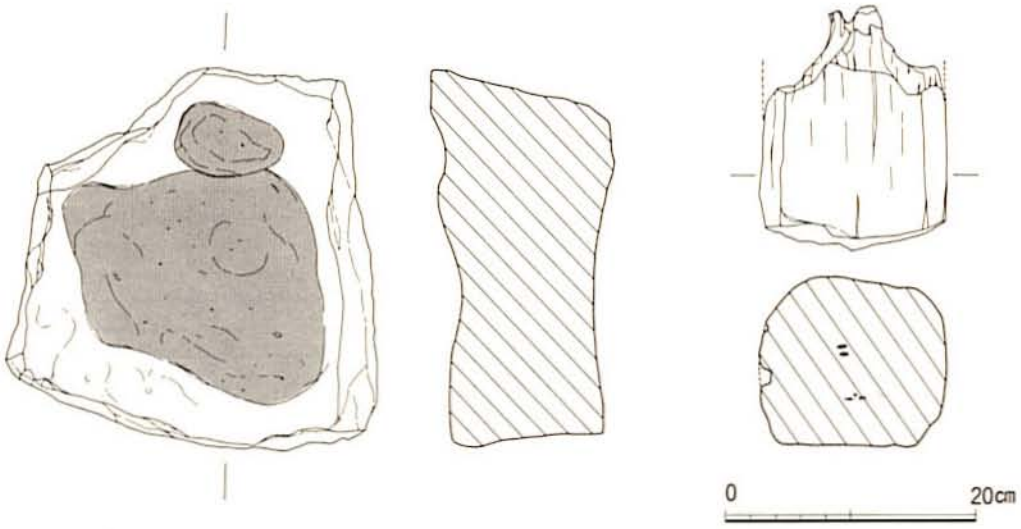


図11　大龍寺谷地区Ⅱ区出土要石・柱根実測図

石見銀山遺跡・大龍寺谷地区出土陶磁器一覧表

番号	調査区・土層	産地（窯）・種類	年代	番号	調査区・土層	産地（窯）・種類	年代
1	Ⅰ区褐色土層	中国　白磁皿（景徳鎮窯系）	16C後半～17C初	47	Ⅰ区暗褐色土層	唐津　鉄絵皿、胎土目	1590～1610年代
2		〃　白磁皿か	〃	48		〃　灰釉碗	〃
3		〃　染付碗（景徳鎮窯系）口縁部四方襷文帯	〃	49		〃　鉄・藁灰釉掛分袋物	〃
4		〃　染付小坏（景徳鎮窯系）見込花弁文	〃	50		〃　鉄絵大皿	〃
5		〃　染付碗（福建・広東系）	〃	51		〃　灰釉皿	〃
6		〃　染付碁笥底皿か	〃	52		〃　灰釉鉢か	1590～1630年代
7		〃　染付皿（景徳鎮窯系）	〃	53		〃　擂鉢	〃
8		〃　〃	〃	54		〃　灰釉皿	1590～1610年代
9		〃　〃	〃	55		〃　〃	〃
10		〃　〃	〃	56		〃　〃	〃
11		〃　〃	〃	57		〃　〃	〃
12		〃　染付	〃	58		〃　〃	〃
13		〃　〃	〃	59		〃　〃	〃
14		〃　〃	〃	60		〃　〃	〃
15		〃　〃	〃	61		〃　〃	〃
16		〃　〃	〃	62		〃　〃	〃
17		唐津　灰釉大皿	16C末～17C初	63		〃　〃	〃
18		唐津系　灰釉皿、胎土目	〃	64		〃　灰釉溝縁皿	1600～1630年代
19		〃　鉄釉皿	17C前半	65		〃　灰釉皿、砂目	〃
20		肥前　染付皿	17C前半	66		唐津系　灰釉皿	1590～1610年代
21		〃　鉄釉掛分け碗か	1630～50年代	67		〃　〃	〃
22		〃　染付蓋物の蓋、蛇籠に芦文	18C	68		〃　〃	〃
23		〃　染付小碗か	19C～幕末	69		〃　〃	〃
24		〃　染付蓋物の蓋	18C後半～幕末	70		〃　〃	〃
25		肥前か　京焼風陶器呉器手碗	17C後半～18C前半	71		〃　〃	〃
26		唐津系　刷毛目碗か	17C前半～18C前半	72		〃　〃	〃
27		肥前系　陶胎染付碗	18C	73		〃　〃	〃
28		福岡か　藁灰釉皿	17C前半	74		〃　〃	〃
29		〃	17C前半	75		〃　〃	〃
30	Ⅰ区暗褐色土層	中国　青磁香炉（竜泉窯系）	14C後半～15C	76		〃　〃	〃
31		〃　染付（景徳鎮窯系）	16C後半～17C初	77		〃　〃	〃
32		〃　〃	〃	78		〃　〃	〃
33		〃　〃	〃	79		〃　〃	〃
34		〃　染付皿（景徳鎮窯系）、見込菊文	16C末～17C初	80		〃　〃	〃
35		〃　染付碗（景徳鎮窯系）	16C後半～17C初	81		〃　〃	〃
36		〃　〃	〃	82		〃　〃	〃
37		〃　〃	〃	83		〃　〃	〃
38		〃　染付碗（福建・広東系）	16C末～17C初	84		〃　〃	〃
39		〃　染付皿（福建・広東系）	16C後半～17C初	85		〃　〃	〃
40		〃　染付（福建・広東系）	〃	86		〃　〃	〃
41		〃　染付皿	〃	87		〃　〃	〃
42		〃　染付皿か	〃	88		〃　〃	〃
43		〃　白磁皿か	〃	89		〃　〃	〃
44		〃　五彩（色絵）碗か	明末	90		〃　長石釉碗か	〃
45		〃　染付	〃	91		〃　鉄釉袋物	1590～1630年代
46		〃　〃	〃	92		〃　灰釉溝縁皿、砂目	1600～1630年代

番号	調査区・土層	産地（窯）・種類	年代
93	Ⅰ区暗褐色土層	唐津系　灰釉溝縁皿、砂目	1600～1630年代
94		〃　〃	〃
95		〃　碗	16C末～17C初
96		〃　灰釉皿	〃
97		〃　鉄墨灰釉掛分け瓶	〃
98		〃　叩き成形袋物	〃
99		〃　〃	〃
100		〃　〃	〃
101		〃　鉄釉碗	〃
102		〃　叩き成形袋物	16C末～1630年代
103		〃　〃	〃
[illegible]		〃　〃	〃
105		〃　〃	〃
106		〃　〃	〃
107		唐津系か　叩き成形袋物	16C末～17C初
108		〃　鉄釉袋物	17C前半
109		肥前　青磁碗か	17C
110		〃　染付碗	18C
111		〃　染付碗、砂ヘラ削、砂口縁四方欅文	1610～30年代
112		〃　染付皿	1620～30年代
113		〃　染付小碗、砂花弁文	〃
114		〃　染付皿、コンニャク印刷	1690～18C前半
115		〃　白磁碗か	18C以降
116		肥前か　染付瓶	17Cか
117		上野・高取系　墨灰釉皿	17C前半
118		福岡か唐津系　墨灰釉瓶	16C末～17C初
119		〃　墨灰釉碗	17C前半
120		〃　長石釉皿か	16C末～17C前半
121		福岡か山口　墨灰釉碗	17C前半
122		〃　〃	〃
123		福岡か　墨灰釉碗か	〃
124		備前系　瓶か	16C末～17C前半
[illegible]		〃　〃	〃
[illegible]		〃　〃	〃
127		信楽　壺	〃
128		瀬戸・美濃系　灰釉皿	16C後半
129		〃　〃	16Cか
130	Ⅱ区明灰色粘土	中国　白磁皿	16C
131	層	〃　染付皿	16C後半～17C初
132		〃　〃	〃
133	Ⅱ区茶褐色粘質	〃　白磁皿	16C
134	土層	〃　染付碗（景徳鎮窯系）	16C後半
135		〃　染付碗（福建・広東系）	16C後半～17C初
136		〃　染付碗（景徳鎮窯系）	〃
137		〃　染付か（景徳鎮窯系）	〃
138		〃　〃	〃
139		〃　〃	〃
140		〃　染付皿（景徳鎮窯系）	〃
141		〃　〃	〃
142		〃　〃	〃
143	Ⅱ区茶褐色粘質	中国　染付皿（福建・広東系）	16C後半～17C初
144	土層	唐津　灰釉皿	1590～1630年代
145		〃　〃	〃
146		〃　皿	〃
147		〃　〃	〃
148		唐津系　灰釉皿	16C末～17C初
149		〃　〃	〃
150		〃　鉄釉袋物	〃
151		〃　鉄釉天目茶碗	17C前半
152		肥前　青磁	1630～40年代
153		〃　青磁大皿、梅折枝貼付文、ヘラ彫文様	〃
154		〃　染付仏飯器	1630～17C後半
155		〃　青磁碗か	17C前半
156		肥前系　陶胎染付碗	18C
157		唐津系　刷毛目火入か	18C頃
158		上野・高取系　蓋灰釉大皿	17C前半
159		福岡か唐津　灰釉鉢	1590～17C初
160		備前系　壺	
161		〃　〃	

• 本表は大龍寺谷地区出土の陶磁器のうち生産地が明確である中国・唐津・肥前（伊万里）を中心に作成した。生産地等不明のものも含め大龍寺谷地区の出土遺物の総数は以下の通りである。

大龍寺谷地区出土遺物総数　237（Ⅰ区…185　Ⅱ区…52）

中国	47	Ⅰ区… 33	Ⅱ区… 14	19.8％
唐津・唐津系	75	Ⅰ区… 75	Ⅱ区… 9	31.6％
肥前・肥前系	20	Ⅰ区… 15	Ⅱ区… 5	8.5％
福岡・上野・高取系	11	Ⅰ区… 9	Ⅱ区… 2	4.7％
瀬戸・美濃系	2	Ⅰ区… 2	Ⅱ区… 0	0.8％
備前・備前系	5	Ⅰ区… 3	Ⅱ区… 2	2.1％
陶器（不明）	38	Ⅰ区… 31	Ⅱ区… 7	16.0％
磁器（不明）	32	Ⅰ区… 23	Ⅱ区… 9	13.5％
カワラケ	7	Ⅰ区… 3	Ⅱ区… 4	3.0％

• 本表は大橋康二氏の教示を得て遠藤が作成した。尚参考文献として大橋康二『肥前陶磁』（ニュー・サイエンス社、1989年）がある。

Ⅳ　ま　と　め

今年度調査を実施した蔵泉寺口番所跡は、銀山の入り口に置かめた九つの番所跡の一つである。今年度の調査地は番所跡と推定されるところで何らかの構築物の遺構が検出されることが予測されていたが、検出した遺構は石列と遺構面の広がりのみであった。石列は整地面の段差になるわずかな斜面に築かれているものの、不規則に並べられ斜面を補強するような構造になっている。整地層は調査地内で少なくとも３回はおこなわれており、この層は礫・カラミからなる層で、整地のために銀山の坑道付近から運ばれてきたものである。この整地面の広がりは調査区内で西に向かって狭くなり石列につながっていく。この遺構の性格としては番所の入り口前後の広場とそれに続く道と考えられる。今回検出した遺構と昨年度検出した石列、さらには現在残る道路との位置関係は図12の様になる。

蔵泉寺口番所跡から出土した遺物としては、整地層から出土した陶磁器がある。陶磁器は16世紀後半以降のもので中国磁器・肥前陶磁、近隣で焼かれた石見焼きなどがある。礫

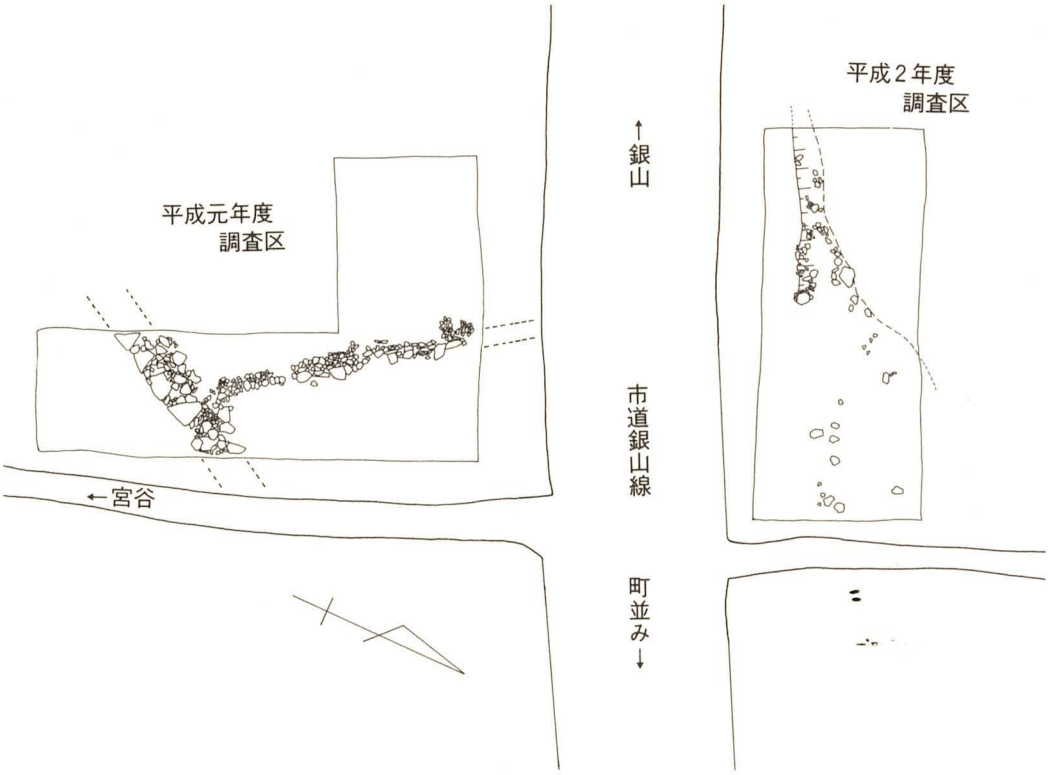


図12　蔵泉寺口番所跡遺構配置図（1/200）

・カラミなどと共に二次的に運ばれた陶磁器は石見銀山の最盛期にあたる16世紀第４四半期から17世紀前半の中国磁器・唐津焼が多く、このことは番所が江戸時代に入り整地・構築されたことを裏付けるものである。また18世紀後半以降の肥前磁器が調査区の西でまとまって出土しており、この部分は建物の建替えに伴う整地と思われる。

大龍寺谷地区は戦国時代銀山を巡る攻防戦が繰り広げられた山吹城跡の城下の一角に位置する谷である。山吹城大手の下屋敷地区の東に位置し、谷奥には天正12年（1584）に開基した臨済宗の大龍寺跡がある。この谷は山吹城防御の拠点の一つと考えられ、谷の入り口部分には、城下町の広がりも予想された。調査は入り口部分の水田で４ｍのグリットを３ケ所設定し、遺構として整地面と建物跡の一部を検出した。

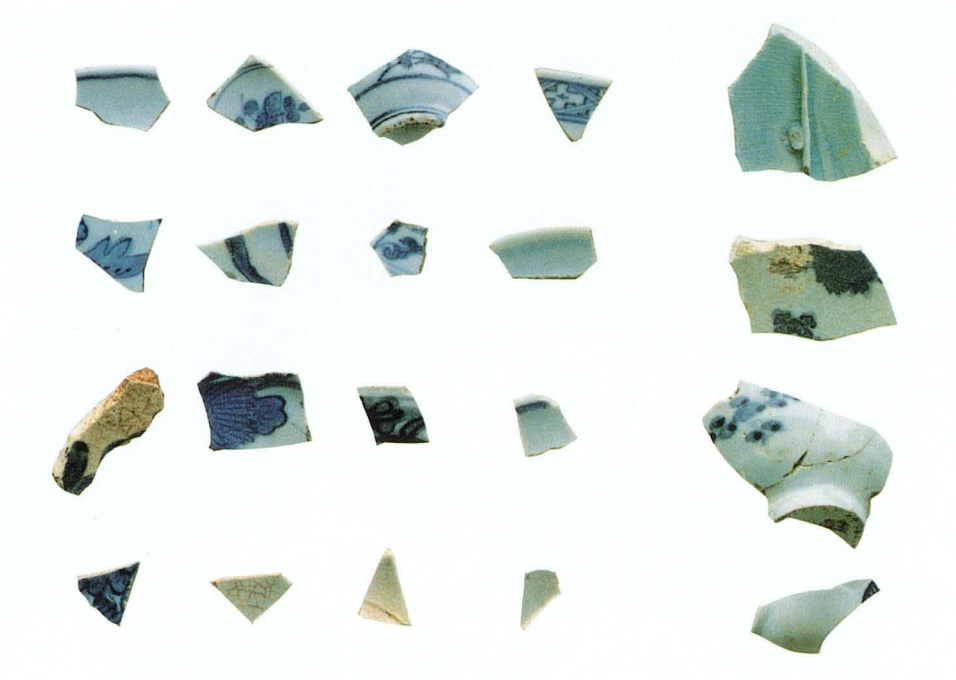
Ⅰ区では整地面で溝状遺構とピットを検出している。これらの遺構は小規模な建物跡と考えられるが規模・構造等不明な点が多い。またこの整地層の下は礫を入れた基盤層があり、大規模な整地がおこなわれたことが窺える。この整地層から出土する陶磁器としては16世紀後半以降の中国磁器・唐津焼等があり、整地の時期については戦国時代まで遡る可能性がある。Ⅱ区では柱根の残る柱穴と整地面に埋め込まれた要石を検出している。調査面積が限られていたために全体の構造は不明だが、柱穴の近くで整地面に鉱石を砕く台石の要石が埋め込まれていたことで、鉱夫が住んだ建物跡と考えられる。この整地面に伴う遺物としてはノミが１点あるのみで、遺構の時期については近世になると考えられる。整地層からはⅠ区と同様に16世紀後半以降の陶磁器類が出土しているが、中に青磁の香炉や仏飯器などもあり、大龍寺に関係するものもわずかながら含まれる。

調査の結果大龍寺谷の性格は、戦国時代には山吹城の縄張りの中に位置づけられ谷奥に大龍寺が置かれ、また城下町の広がりが谷の入り口部分まであった可能性がある。この点については今後の調査が待たれるところである。近世になると銀山で働く鉱夫が住んだ建物が何軒か建ち、近代まで存続したと考えられる。

昭和63年度から継続している発掘調査も３年度目を迎えた。これまでの調査の成果として個々の遺跡の性格にもよるが、遺構は比較的良好な状態で重層的に遺存すること、出土する陶磁器は銀山の最盛期である16世紀後半～17世紀前半以降のものであること、また整地層が坑道から運び出した礫（ズリ）・鉱滓（カラミ）などで築成されていることなどが各調査地で確認され、石見銀山遺跡の大まかな様相が明らかになりつつある。今後は石見銀山遺跡総合整備計画のなかで、将来的な整備を前提とした発掘調査計画の策定が必要となってきている。

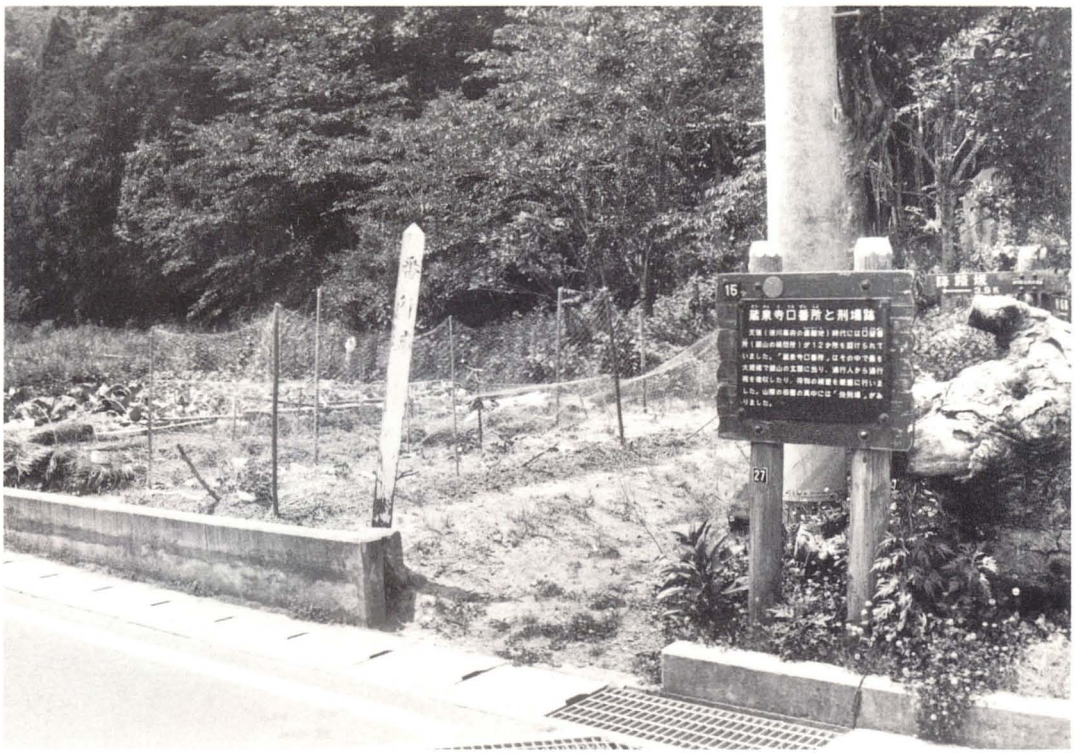
蔵泉寺口番所跡出土中国磁器

蔵泉寺口番所跡出土唐津系陶器



大龍寺谷地区出土陶磁器（１）

大龍寺谷地区出土陶磁器（２）



蔵泉赤口番所跡

蔵泉寺口番所跡 北壁土層

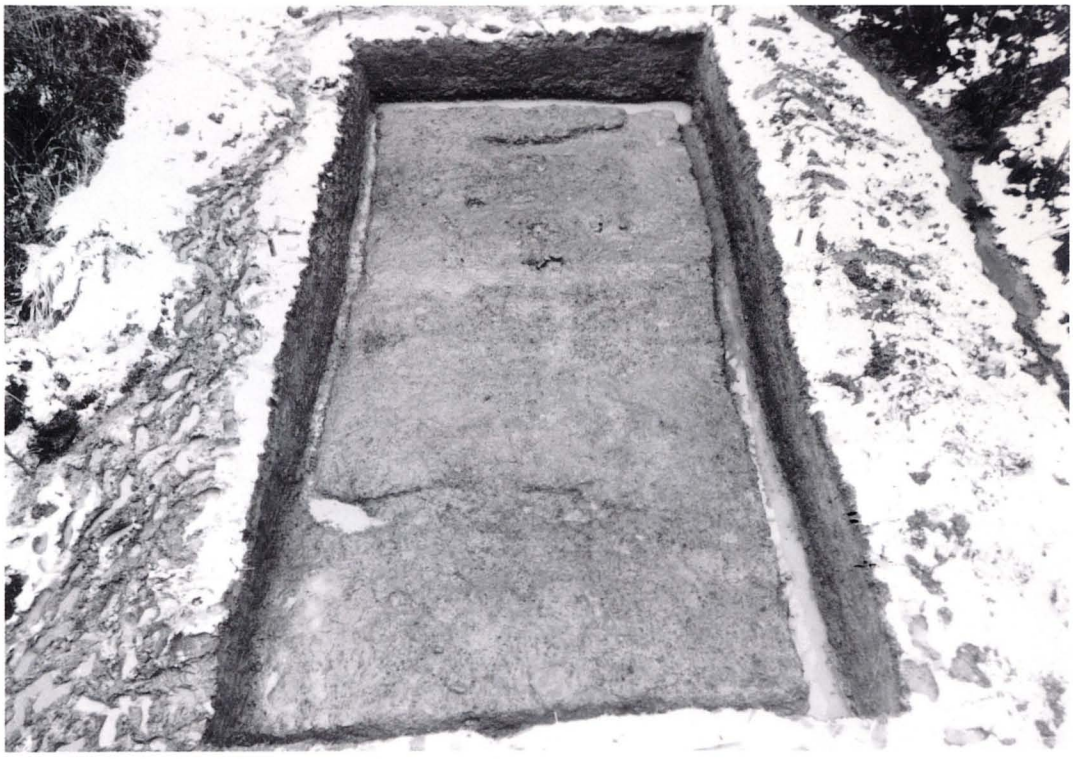
蔵泉寺口番所跡 東壁土層と石列検出状況

蔵泉寺口番所跡 遺構検出状況

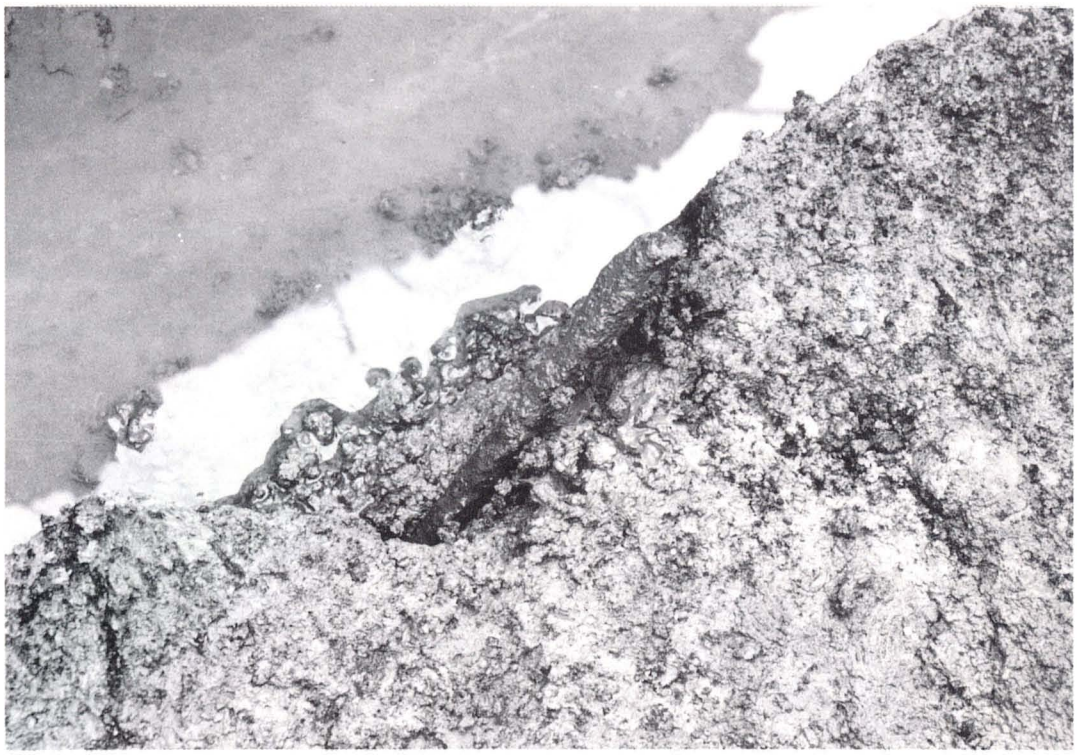
大龍寺谷　遠景

大龍寺跡に残る無縫塔

大龍寺谷地区Ⅰ区 西壁土層



大龍寺谷地区Ⅰ区 遺構検出状況

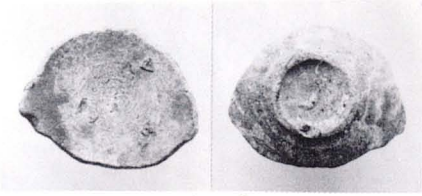


大龍寺谷地区Ⅱ区 ノミ出土状況

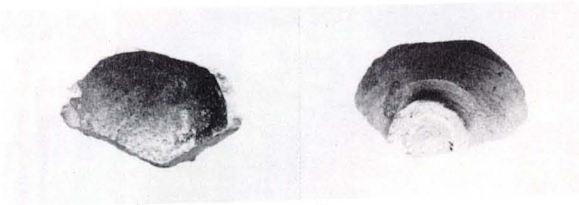
大龍寺谷地区Ⅱ区 遺構検出状況

4－1

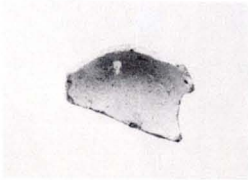
4－2



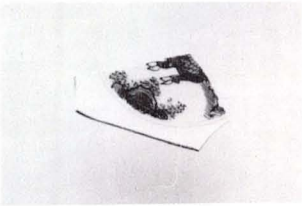
4－3



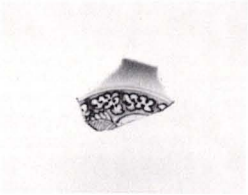
4－4



4－5

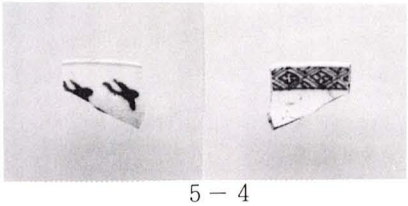


5－1

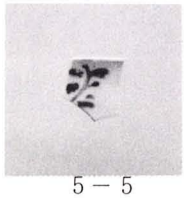


5－2

5－3

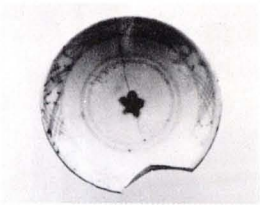


5－4



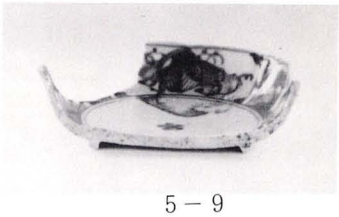
5－5

5－6



5－7

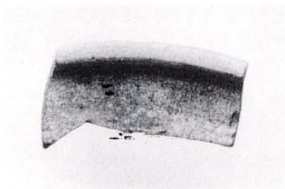
5－8



5－9

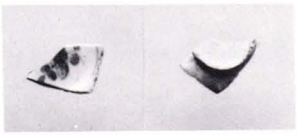
5－10

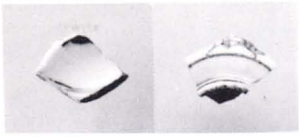
5－11

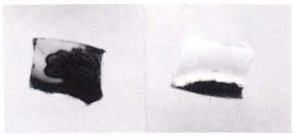


5－12

蔵泉寺口番所跡出土遺物

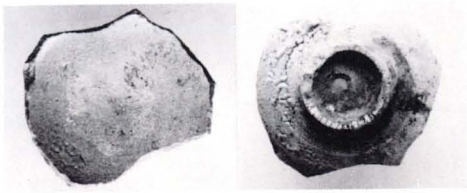

9－1

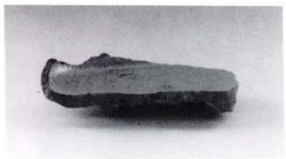

9－2


9－3

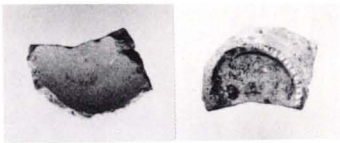
9－4

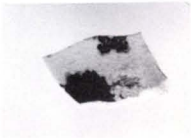
9－5


9－6

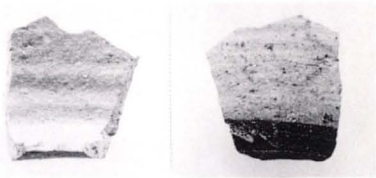

9－7

9－8


9－9


9－10

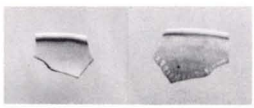
9－11


9－12

10－1

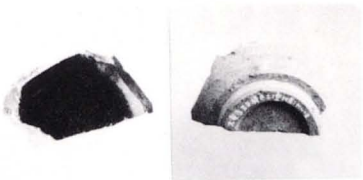
10－2

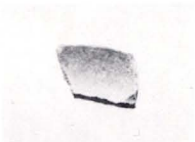
10－3

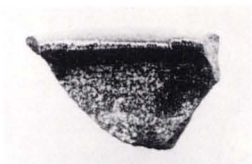

10－4

10－5

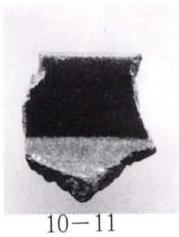
10－6

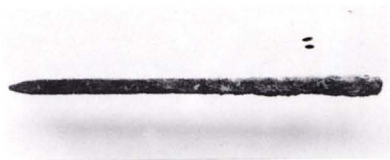

10－7


10－8


10－9

10－10


10－11


10－12

大龍寺谷地区出土遺物

大田市埋蔵文化財調査報告　12

石見銀山遺跡発掘調査概要 4

1991年3月

島根県大田市教育委員会

（島根県大田市大田町大田ロ1111番地）